



Title	パレスチナ問題における「共生」への備忘録
Author(s)	井坂, 智人
Citation	未来共生学. 2016, 3, p. 449-452
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/56238">https://doi.org/10.18910/56238</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## パレスチナ問題における 「共生」への備忘録

井坂 智人

大阪大学大学院国際公共政策研究科博士後期課程

先日、私はふとしたことから世界地図のポスターを手に入れた。日本を中心に左右へと広がるその世界には、小さな文字で各国の名前と首都が書かれてある。私がパレスチナの場所を何気なく探すと、地中海とヨルダン川とを挟むその地域には、一つだけ「イスラエル」という文字が見える。5年前、私は確かにその場所でパレスチナ人たちとともに暮らし、笑い、語り合った。しかし、いま自分の目の前にあるこの「世界」地図のどこを探しても、その「パレスチナ」は存在しないのだった。部屋に飾れば誰にも気づかれず、生活の中で見過ごされていくようなこの地図に、実はパレスチナという名前が存在しない。このことに、果たしてどれほどの人が自覚を持っているのだろう。

2015年の夏、私はある学生団体の取り組みを通じて、イスラエル、パレスチナ、そして日本から集まった学生約20人との勉強合宿に参加した。私たちは、広島県の山奥にある廃校を貸し切り、そこで2週間、24時間衣食住を共にしながら、まさに缶詰状態でパレスチナ問題と向き合った。複数のパレスチナ人参加者にとっては軍服姿以外のイスラエル人と会う初めての機会であり、またイスラエル人参加者にとってもパレスチナ人とこれほど密に生活空間を共にし、生々しい占領下の暮らしを直接耳にするのは初めてであった。現在の激しい敵対関係を考えれば、イスラエルから来たユダヤ人とアラブ（パ

レスチナ)人、そして西岸地区やガザ地区から来たパレスチナ人たちが肩を並べるこの取り組みが、双方にとって極めて異例なものであったことは疑い得ない。彼らが、時に紛争という文脈から離れて互いに生活を共にし語り合う。そのとき、そこには敵対関係を越えた気づき生まれ、また同時に、個々人にとっての譲れない思いが際立って見えることとなった。

この合宿を振り返るたびに、私の心の中に繰り返し浮かぶ情景がある。イスラエル人の苦しみとパレスチナ人の苦しみを比べる議論になればいつも、結局は互いを非難しあう水掛け論にしかならなかった。にもかかわらず、毎夜遅くまで私たちは互いの人生を語り、恋愛を語り、政治をしたたかに笑い飛ばした。ある夜、パレスチナを封鎖する検問所のイスラエル軍兵士を真似て、パレスチナ人学生が冷蔵庫の前でイスラエル人青年を止めて、おどけて見せたこともあった。

合宿でのこうした彼らの姿には、国境を超えた友情と希望があった。驚きに満ちたこの2週間の合宿が、参加した「仲間」にとって大きな意義を持ち、将来の和解への確かな手がかりになりうると、私は心底思った。

しかしながら、他方でこの問題を学んできた私は、この取り組みの素晴らしさを改めて語ろうとすると、ささくれ立った自分の気持ちに躓かざるをえない。現在のパレスチナ問題を考えたとき、相互交流に希望を見出す姿勢、ヒューマンイズムの勝利を楽観する姿勢にこそ、慎重に検討されるべき問題があると思えるからだ。

私は、広島でイスラエル人とパレスチナ人たちが同じ空間を共有し、互いへの尊重と共感の中で語り合う姿を目撃した。しかし、現実世界におけるイスラエル人とパレスチナ人との間には、彼らの意識の如何にかかわらず「占領」という構造的な非対称性がある。そうである以上、紛争当事者たちの人間としての信頼関係に希望を見出す姿勢には、実社会を規定する「占領」の厳しい現実から目をそらし、忘却する危うさをはらんでいる。私たちが非当事者としてパレスチ

ナ問題の深みを捉えるとき、こうしたズレに向き合わざるをえない。それがもたらす揺らぎをたえず体全体でコントロールしながら、ロープの上を綱渡りしていくようなバランス感覚を持たなければ、両者の共生を語ることも自体が、結果として、問題の解決を一層難しくさせてしまうと私には思える。

私は、イスラエル人とパレスチナ人との対話の意義を否定したいわけでは決してない。むしろ、その逆である。他者への不寛容さが原動力となっているようなこの問題に、両者の対話は必要不可欠である。そうであるからこそ、私はそこに厳然と存在する「占領」という現実を考えたい。西岸地区やガザ地区のパレスチナ人たちの生活は、すべて占領者であるイスラエル側の一方的な意向に左右され、食料や医療物資の欠乏によって生命さえ脅かされている。こうした非人道的な占領政策を考えれば、彼らがイスラエルに対して憎悪を抱くのは当然だろう。誰も、「占領」の非人道性を感じるに違いない。

そんな思いを抱いていた私は、合宿中、イスラエル人の友人に「占領」の意義について問うてみた。彼らは当然のごとく自国の苦難を説き、自らを正当化した。私が問題視する「占領」は、まさしくイスラエル人にとって自国の安全を保障するための正当な政策に他ならない。こうした事情を踏まえない限り、イスラエル人に自省を促すはずの私の「正当」な倫理的問いかけは、パレスチナ人によるテロ行為の免罪符としてイスラエル人の耳に空しく響くだけだろう。彼らが抱える憎悪や苦しみもまた、長期的な紛争の結果に違いない。

彼らの発言に私は戸惑いを覚えつつ、生活上の不安からくる彼らの個人的な語りを否定したくはない。

過去100年以上の歴史を持ち、今なお現在進行形で人々の生活を蝕んでいるパレスチナ問題は、イスラエルとパレスチナ双方に大きな犠牲と代償を払わせ続けている。こうした中でイスラエル人とパレスチナ人の共生を実現するためには、「占領」という構造的な権力関係に鋭く眼を向けながらも、双方に対する人間的眼差しを保ち続けるという極めて困難な命題と葛藤に向き合うことが絶対に必要だ。

紛争によってもたらされた悲惨さや悲しみを耳にする時、それがたとえイスラエル人であろうとパレスチナ人であろうと、私たちの心は等しく傷つく。まさにその時、「パレスチナ」という言葉の存在しないあの世界地図は、部屋の片隅から私たちを鋭く見つめているだろう。そんな現実には、私たちは果たしてどこまで想像力を働かせられるだろうか。